

2024 年 7 月

食料安全保障月報

(第 37 号)



令和 6 年 7 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024年7月食料安全保障月報（第37号）

目次

概要編

I	2024年7月の主な動き	1
II	2024年7月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国の生育状況と貿易動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 1
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 2
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 3
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 5
5	食品小売価格の動向	1 9
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 0
7	FAO 食料価格指数	2 2

今月のコラム

	「米国太平洋岸北西部（PNW）のビール事情」	2 3
--	------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	<米国>	2024/25年度の生産量は上方修正され54.7百万トンの見込み
	<カナダ>	2024/25年度の生産量は上方修正され35.4百万トンの見込み (AAFC)
	<豪州>	7月前半の降雨が主要生産地の小麦の生長を促進
	<EU27>	2024/25年度の生産量は上方修正され128.4百万トンの見込み (欧州委員会)
	<ロシア>	2024/25年度の収穫は前年度より早いペースで進展も品質低下 の懸念
	<ウクライナ>	2024/25年度の収穫は前年度より早いペースで進展
	<中国>	2024/25年度の小麦の生産量は138.2百万トン（中国国家統計局）
2	とうもろこし	9
	<米国>	作付面積の増加により、生産量は6.1百万トン上方修正
	<ブラジル>	2024/25年度の見込みは増加の見込み
	<アルゼンチン>	2024/25年度の見込みは、前年度から減少する見込み
	<ウクライナ>	2024/25年度の見込みは、前年度より10.6%減の見込み
	<中国>	2024/25年度の見込みは、前年度から増加する見込み

3 コメ	15
<タイ>	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加見込み
<米国>	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ増加
<中国>	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ増加
<インド>	2024/25年度の生産量は、前年度比で0.7%増加
<ベトナム>	2024/25年度の生産量は、前年度並みの27.0百万トンの見込み
II 油糧種子	
大豆	21
<米国>	作付面積の減少により、生産量は0.4百万トン下方修正
<ブラジル>	2024/25年度の生産量は前年度より増加する見込み
<カナダ>	作付面積の増加により、生産量は0.2百万トン上方修正
<中国>	2024/25年度の生産量は、前年度より減少する見込み
<アルゼンチン>	2024/25年度の生産量は、前年度より増加する見込み
(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2024/25年度)	27
(参考2) 単位換算表	27
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)	28

【利用上の注意】

表紙写真: カナダのサスカチュワン州カイル市の圃場。4月8日に播種した春撒き小麦の大部分は出穂し、一部は開花している。(サスカチュワン州カイル市2024年7月3日)。

(概要編)

I 2024年7月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2024/25年度の作況について、北半球では冬小麦が収穫期を迎えており、とうもろこし等の作物は生育期を迎えている。なお、南半球では2023/24年度の作物が収穫期を迎えている。

2024/25年度の状況について、品目別にみると、7月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、ロシア及びウクライナで単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、米国で単収・収穫面積ともに増加、インドで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意（黒海穀物イニシアティブ）については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EUの東欧経由での輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル及びEUで単収・収穫面積ともに前年度より増加、中国で収穫面積が増加するものの、米国で収穫面積の減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジルや米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に植物油と砂糖、乳製品の価格上昇と穀物の価格低下が同程度となったことにより、5月の120.6から、6月（最新値）は120.6と横ばい（参考：2023年6月123.1、2022年6月154.7、2021年6月125.3、2020年6月93.3）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024年7月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDAの7月需給報告によれば、2024/25年度の小麦の生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より15%減少し1,950万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量も、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より11%減少し2,770万トンとなる見込み。2024/25年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より28%減少し1,300万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より13%減少し2,450万トンとなる見込み。

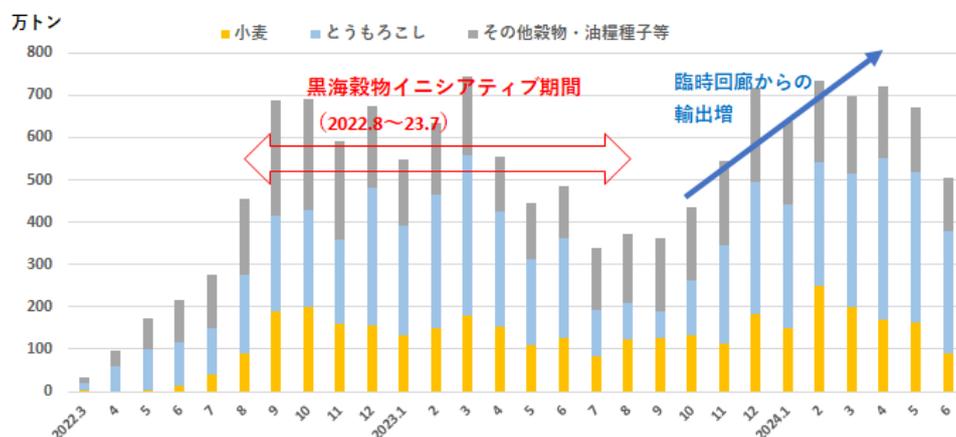
ウクライナ気象センターによれば、6月末現在、2024年度の冬小麦は黄熟期若しくは完熟期を迎えており収穫が始まっている。作柄は概ね良好若しくは平年並み。春小麦は乳熟期から黄熟期を迎えており、西部及び東部の一部で水分不足の影響による葉の黄変が発生している。とうもろこしは子葉形成期から開花期を迎えており、作柄は概ね良好であるものの、西部及び南部の一部で水分不足の影響による葉の黄変が発生している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ピブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022年8月～23年7月）は、穀物・油糧種子等6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が増加している。ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年8月～24年6月までの穀物・油糧種子等の輸出量は6,397万トン（うち小麦1,706万トン、とうもろこし2,747万トン）（参考）。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年6月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 EU・ロシア：高温乾燥によりとうもろこしの作柄が悪化

USDA の 7 月需給報告によれば、2024/25 年度の EU のとうもろこしの生産量は、6,400 万トンと、前月から 80 万トン下方修正されたものの、前年度より 5% 増加し、平年並みの見込み。収穫面積は 865 万ヘクタールと、前年度より 4% 増加するものの、平年を 3% 下回る見込み。単収は 7.40 トン/ヘクタールと、前月予測から 1% 下方修正されるものの、前年度より 1% 増加し、平年を 3% 上回る見込み。

EU のとうもろこしの生産量の下方修正（80 万トン減）は、南東ヨーロッパのルーマニア（40 万トン）、ハンガリー（25 万トン）、クロアチア（10 万トン）、ブルガリア（5 万トン）の下方修正によるもの。灌漑施設に限りがあるバルカン半島の夏作物は高温乾燥の影響を受けやすく、近年、高温乾燥が頻発し、とうもろこしの単収が悪化したことから、農家はとうもろこしの作付けに消極的になっている。7 月上旬、とうもろこしは登熟期を迎えており、高温乾燥の影響を受けたとうもろこしの被害が確認されている。

2024/25 年度のロシアのとうもろこしの生産量は、1,500 万トンと、前月から 40 万トン下方修正され、前年度より 10% 減少する見込み。単収は 6.00 トン/ヘクタールと、前月から 3% 下方修正され、前年度より 13% 減少する見込み。収穫面積は 250 万ヘクタールと、前年度より 4% 増加する見込み。

ロシア農務省によれば、春先からロシア南西部で高温乾燥が続いたことから、作付期の土壌水分が不十分となった。6 月上旬の高温の影響により作柄の更なる悪化が懸念されている。

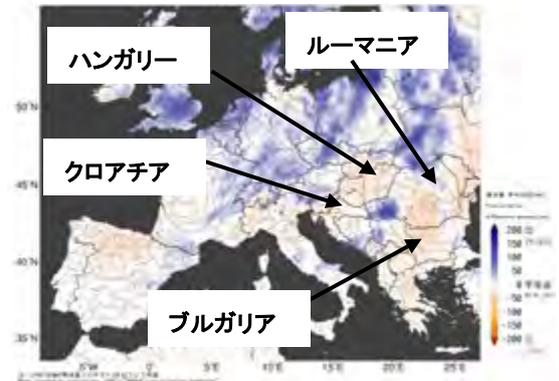
2 パキスタン：コメの生産量が過去最高に

USDA によれば、2024/25 年度のパキスタンのコメ生産量は、良好な作付条件と十分な水供給に恵まれ、前月から 50 万トン上方修正され、前年度より 1% 増加し、過去最高の 1,000 万トン記録する見込み。収穫面積は過去最高の 380 万ヘクタールと前年度より 4% 増加する見込み。単収は 3.95 トン/ヘクタールと前月から 5% 上方修正されたものの、過去最高を記録した前年度からは 3% 下回った。近年の単収の向上は、高単収ハイブリッド米品種の導入によるもの。他の作物と比較してコメの収益性が高いことから、2022/23 年度以降、急速に作付けが増加した。

パキスタンでは、コメは灌漑用水により栽培され、灌漑用水の大部分はタルベラ貯水池より供給されている。パキスタンはバスマティ米及び IRRI 米（白長粒種）の主産国であり、輸出国でもある。2024/25 年度は 590 万トン輸出する見込みであり、コメの輸出は同国の主要な外貨獲得源となっている。

図 1：欧州南東部の降雨量平年対差（2024. 7. 1～7. 15）

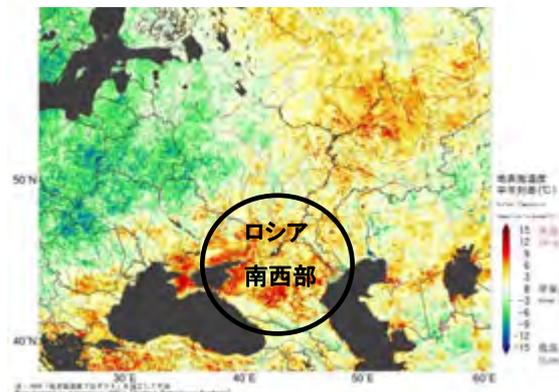
7月上旬の欧州南東部は高温乾燥



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図 2：ロシア南西部の地表面温度平年対差（2024. 6. 1～6. 15）

6月上旬のロシア南西部は高温乾燥



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

3 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、海運各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。

また、パナマ運河については、2023年7月以降、降雨不足による水位低下に伴う通航制限が継続している。2024年6月11日、雨季の到来により、パナマ運河庁は7月11日より1日当たりの通航船舶を32隻から33隻に、同22日より34隻に増加すると発表した。

我が国の穀物輸入に関しては、小麦は主に米国・カナダ西海岸及び豪州から輸入しており、上記2つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くは喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多いが、パナマ運河の通行料の高止まり等の影響により、米国西海岸（PNW）や喜望峰経由に切り替えている例もみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



II 2024年7月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、6月末、200ドル/トン台前半で推移。7月に入り、輸出成約高が市場予想を上回ったこと等を受けて、210ドル/トン台前半まで上昇。その後、米国の順調な収穫進展や期末在庫の増加等を受けて、190ドル/トン台半ばまで下落したものの、EU等の生産懸念から値を上げ、7月中旬現在、190ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、6月末、150ドル/トン台後半で推移。7月に入り、米国中西部での高温予報を受けた作柄懸念等を受けて、160ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国中西部におけるハリケーンに伴う降雨予報等を受けて下落し、7月中旬現在、150ドル/トン台前半で推移。

コメは、6月末、640ドル/トン台半ばで推移。7月に入り、インドの輸出規制に下支えされながらも、新穀の出回りによるタイ国内価格の低下等から値を下げ、7月中旬現在、600ドル/トン台前後で推移。

大豆は、6月末、420ドル/トン台前半で推移。7月に入り、米国中西部での高温予報を受けた作柄懸念等を受けて、430ドル/トン台後半まで上昇したものの、米国中西部における降雨予報及び米国産の作柄改善等を受けて下落し、7月中旬現在、400ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より1.0%増の28.37億トン。消費量は、前年度より0.8%増の28.39億トンとなり、5年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り27.3%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.37億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.39億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、4.99億トンの見込み。

期末在庫量は、7.74億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は7月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.86億トン。消費量は前年度を上回り6.65億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る21.7%となる見込み。

(注：数値は7月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による)

V 今月の注目情報: 米国の生育状況と貿易動向

USDAは、6月28日、作付面積調査結果を公表した。小麦、とうもろこしの作付面積は前年度から減少し、大豆の作付面積は増加した。現在の生育状況は、小麦、とうもろこし、大豆ともに生育に適した天候に恵まれ順調に生長しており、いずれも作柄は良好で豊作が期待される。輸出については、豊作に伴う価格競争力の高まりから、小麦はロシアをはじめとする主要輸出国、とうもろこし、大豆は主にブラジルとの輸出競争が加熱するとみられる。米国の生産動向とそれを取り巻く貿易動向についてまとめた。

注：文中の「2024/25 年度」等は市場年度で、米国の小麦は 2024 年 6 月から 2025 年 5 月、とうもろこし及び大豆は 2024 年 9 月から 2025 年 8 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

1 作付面積調査結果

USDA が 6 月 28 日付けで公表した 2024/25 年度の作付面積調査によれば、小麦の作付面積は前年度に比べ 4.7%減少した。このうち生産量の 7 割を占める冬小麦が 8%減少も、デュラムを除く春小麦が 1%増加、デュラム小麦が 29%増加となった。

とうもろこしの作付面積は前年度に比べ 3.3%減少した一方、大豆の作付面積は 3.0%増加した。これは、作付期の価格が、とうもろこしより大豆の作付けに有利であったことから、とうもろこしから大豆に作付けがシフトしたことが要因とみられる。

6 月 28 日のシカゴ相場のとうもろこし価格は、とうもろこしの作付面積及び四半期在庫が市場予想を上回ったことから大きく下落した。小麦価格も、四半期在庫が市場予想を上回ったことや、とうもろこしの下落に連れて下落。大豆価格は、作付面積は市場予想をわずかに下回ったものの、四半期在庫が市場予想を上回ったことから下落した。

2 米国の品目ごとの生育状況

(1) 小麦

USDA 「Crop Progress」(2024.7.15)によれば、冬小麦は収穫期終盤を迎えており、7 月 14 日現在の収穫進捗率は 71%。前年同期(53%)及び過去 5 年平均(62%)をいずれも上回っている。作柄評価については、シーズンを通して生育に適した天候に恵まれ、6 月 30 日時点で「やや良～良」の割合が 51%となっており、乾燥の影響を受けた前年同期の 40%を上回った。他方、春小麦は出穂期を迎えており、7 月 14 日現在の出穂進捗率は

表1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積、収穫面積

	小麦	とうもろこし	大豆
作付面積 対前年度比	4,724 ▲4.7%	9,148 ▲3.3%	8,610 +3.0%
収穫面積予測 対前年度比	3,879 +4.1%	8,344 ▲3.6%	8,526 +3.5%

資料：米国農務省「Acreage」(2024.6.28)
注：1エーカーは約0.4ha

表2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の四半期在庫

	小麦	とうもろこし	大豆
2023年6月	15,501	104,229	21,674
2024年6月	19,107	126,832	26,399
対前年度比	+3.3%	+21.7%	+21.8%

資料：米国農務省「Grain Stocks」(2024.6.28)

表3 米国作付面積報告を受けた価格動向(シカゴ穀物取引所の期近価格)

	6月27日	6月28日	対前日比
小麦	5.60 ⇨	5.54	▲1.1%
とうもろこし	4.14 ⇨	3.97	▲4.0%
大豆	11.52 ⇨	11.51	▲0.2%

写真1 イリノイ州の冬小麦

収穫作業の様子(2024.7.3)



撮影者：ブライアン・スコット氏

76%。前年同期（82%）を下回るものの、過去5年平均（78%）とほぼ同水準となっている。作柄評価については、適時適切な降雨と気温に恵まれ「やや良～良」の割合が77%と、前年同期の51%を上回っている。

USDA 7月需給報告によれば、2024/25年度の米国の小麦生産量は5,466万トンと、前月予測から364万トン上方修正され、前年度から535万トン増加する見込み。

（2）とうもろこし

USDA「Crop Progress」によれば、7月14日現在、とうもろこしはシルキング期を迎えており、シルキング進捗率は41%。前年同期（40%）、過去5年平均（32%）をいずれも上回っている。主産地の中西部で、4月から5月にかけての頻繁な降雨（図1）により作付作業に遅れが生じたが、5月中旬以降、急ピッチで進展した。その後、概ね生育に適した天候に恵まれ作物は順調に生長し、作柄評価は「やや良～良」の割合が68%と、前年同期（57%）を上回っている。

USDA「Feed Outlook」（2024.7.16）によれば、受粉期を迎える今後数週間の気温と降雨が作柄の決定に大きな影響を与えるといわれており、7月終盤から8月にかけての天候に注視が必要となる。

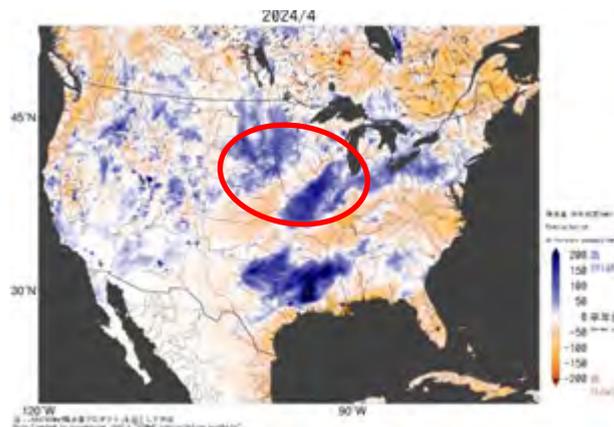
USDA 7月需給報告によれば、2024/25年度の米国のとうもろこし生産量は3億8,356万トンと、前月予測から610万トン上方修正されたものの、前年度からは613万トン減少する見込み。

（3）大豆

USDA「Crop Progress」によれば、7月14日現在、大豆は開花期を迎えており、開花進捗率は51%。前年同期並みであり、過去5年平均（44%）を上回っている。概ね生育に適した天候に恵まれ、作柄評価は「やや良～良」の割合が68%と前年同期（55%）を上回っている。大豆については、開花期を迎える7月から8月までの気温と降雨が作柄の決定に大きな影響を与えるといわれており、今後の天候に注視が必要となる。

図1：北米の降水量の年対差（2024.4）

4月の中西部の降水量は平年を超過



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

写真2 イリノイ州のとうもろこし
殺菌剤散布の様子（2024.7.2）



撮影者：キップ・トムス氏

写真3 アーカンソー州の大豆
防カビ剤噴霧の様子（2024.5.30）



撮影者：マット・マイルズ氏

USDA 7月需給報告によれば、2024/25年度の米国の大豆生産量は1億2,070万トンと、前月予測から41万トン下方修正されるものの、前年度からは736万トン増加する見込み。

3 各国の生産・貿易動向

(1) 小麦

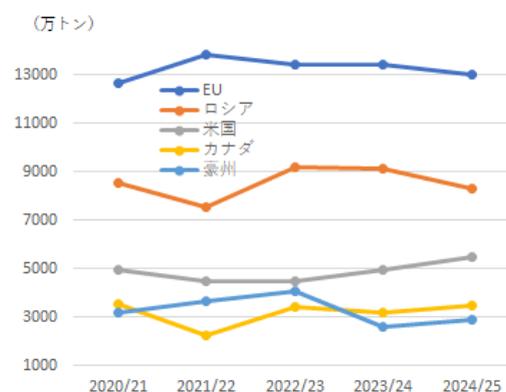
USDA 7月需給報告によれば、2024/25年度の米国産小麦の輸出量は2,245万トンと、前月予測から68万トン上方修正され、前年度から321万トン増加する見込み。これは、生産量の増加に伴い、世界市場で価格競争力が高まると見込まれるため。主要輸出先はメキシコを筆頭にアジア諸国となっている。

一方、他の主要小麦輸出国について、ロシアは、季節外れの霜害と高温乾燥により、2024/25年度の生産量は8,300万トンと、前年度から850万トン減少する見込み。輸出量は4,800万トンと、過去最高を記録した前年度から750万トン減少するものの、米国の輸出量を大きく上回り、5年連続で世界第1位の輸出国を維持する見込み。ロシア政府は、7月より穀物の輸出関税率の実質的な引き下げを行っており、引き続き価格競争力を維持するとみられる。今後も対ロシア制裁を実施していない中東諸国及び北アフリカを中心に輸出を継続しつつ、低価格を強みとしてアジア等へ販路の拡大を図るとみられる。

EUについては、2024/25年度の実生産量は1億3,000万トンと、降雨過多により前年度から415万トン減少し、2020/21年度以来の低水準となる見込み。輸出量についても3,450万トンと、生産減に伴い前年度より250万トン減少する見込み。主要輸出先はアフリカ諸国である。

豪州については、2024/25年度の実生産量は2,900万トンと、エルニーニョ現象による高温乾燥により大幅に減産した前年度に比べ300万トン増加する見込み。輸出量についても2,200万トンと、前年度から200万トン増加する見込み。主要輸出先は中国を始めとするアジア諸国である。同じく、アジア諸国を主要輸出先とするカナダについても、2024/25年度の実生産量は3,500万トンと、高温乾燥で減産した前年度から305万トン増加する見込み。輸出量については2,500万トンと、前年度と同水準の見込み。

図2 主要小麦輸出国の生産量推移
(2020/21～2024/25年度)

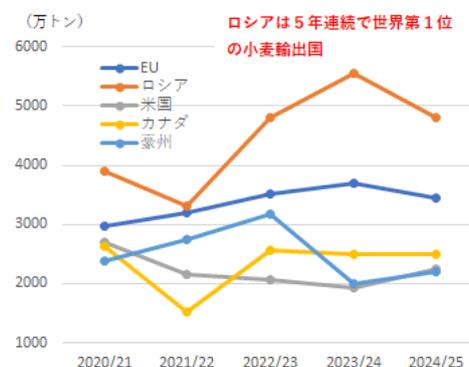


出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

写真4 フランス ヴェル・ドワーズ県
降雨過多が畑作業に悪影響を及ぼし、
雑草が繁茂する圃場 (2024. 7. 3)



図3 主要小麦輸出国の輸出量推移
(2020/21～2024/25年度)



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

(2) とうもろこし

USDA によれば、2024/25 年度の米国産とうもろこしの輸出量は 5,652 万トンと、前月予測から 64 万トン上方修正され、2 年連続で世界第 1 位の輸出国の座を維持する見込み。米国産とうもろこしは価格競争力があり、今後も輸出市場を獲得し続けることが期待される。主要輸出先はメキシコ、中国及びアジア諸国となっている。

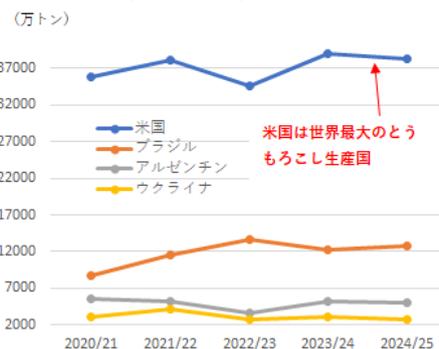
一方、主要なとうもろこし輸出国であるブラジルの 2023/24 年度の生産量は 1 億 2,200 万トンと、主力の冬とうもろこしがエルニーニョ現象による高温乾燥により減産したこと等から、前年度より 1,500 万トン減少し、輸出量も 5,000 万トンと、生産量の減少に伴い前年度より 426 万トン減少する見込み。2024/25 年度の見込みについては、とうもろこしの作付作業が 9 月以降に開始されるため予想の域を出ないが、エルニーニョ現象の収束に伴う好天への期待から、1 億 2,700 万トンと前年度より 500 万トン増加すると見込まれている。輸出量については 4,900 万トンと、期首在庫の減少と国内需要の増加により 100 万トン減少すると見込まれている。

アルゼンチンについては、2023/24 年度の見込み生産量は 5,200 万トンと、一部で病害虫のヨコバイによる被害を受けたものの、全体としてはエルニーニョ現象により生長に適した降雨に恵まれ、前年度より 1,600 万トン増加する見込み。輸出量も 3,700 万トンと、前年度より 1,176 万トン増加する見込み。2024/25 年度の見込みについては、ブラジル同様 9 月以降に作付作業が開始されるため、現時点では予想の域を出ないが、5,100 万トンと前年度より 100 万トン減少すると見込まれている。これは、ヨコバイによる被害が生産農家の作付意欲に負の影響を及ぼしているほか、とうもろこし価格の下落により収益が見込める大豆に作付けがシフトすることが見込まれるためとみられる。輸出量については 3,600 万トンと、生産減に伴い 100 万トン減少すると見込まれている。

ウクライナについては、2024/25 年度の見込み生産量は 2,770 万トンと、ロシアの侵攻による収穫面積の減少や高温乾燥により前年度より 330 万トン減少する見込み。輸出量も 2,450 万トンと、前年度より 350 万トン減少する見込み。

世界最大のとうもろこし輸入国である中国は、従来は主に米国産及びウクライナ産とうもろこしを輸入してきたが、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を受け、同年 11 月から

図 4 主要とうもろこし輸出国の生産量推移 (2020/21~2024/25 年度)



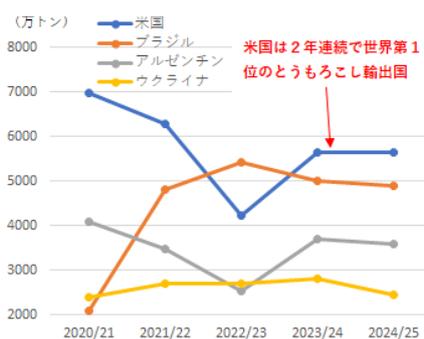
出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

写真 5 アルゼンチン サンタフェ州
とうもろこしの作柄は良好 (2024. 6. 26)



撮影者：José Daniel Peloni

図 5 主要とうもろこし輸出国の輸出量推移 (2020/21~2024/25 年度)



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

ブラジル産とうもろこしの輸入を開始した。その後ブラジルからの輸入が急激に増加し、中国税関によれば、2024年1～5月のブラジルからのとうもろこし輸入量は576万トン、ウクライナからは296万トン、米国からは116万トンと、ブラジルからの輸入量が米国からの輸入量を大きく上回る状況となっている。中国は、食料安全保障の観点から、穀物の国内生産を拡大し、食料の輸入依存の増加に歯止めをかけ、輸入先国を多角化する政策を推し進めており、本年7月からアルゼンチン産とうもろこし輸入が15年ぶりに再開する見通し。アルゼンチンは、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位のとうもろこし輸出国であり、今後、中国市場において、従来からの米国、ブラジル、ウクライナにアルゼンチンを加えた4か国の輸出競争が繰り広げられるとみられる。

(3) 大豆

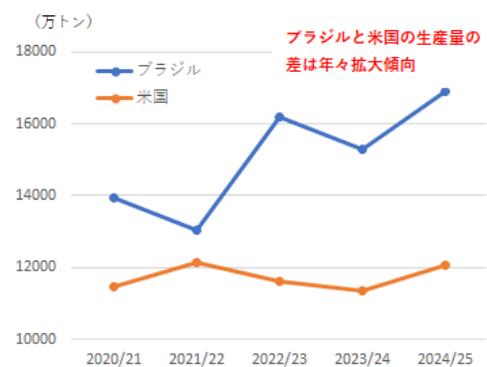
USDAによれば、2024/25年度の米国産大豆の輸出量は、4,967万トンと、生産量の増加を受け、前年度より340万トン増加する見込み。主要輸出先は中国である。

また、ブラジルの2023/24年度の大豆生産量は1億5,300万トンと、エルニーニョ現象による高温乾燥により減産し、前年度より900万トン減少するものの、2年連続で生産量が高水準となったことによる価格競争力と中国向け輸出が堅調なことから、輸出量は1億300万トンと、前年度から750万トン増加し、世界第1位の輸出国を維持する見込み。

2024/25年度の実績については1億6,900万トンと、大豆の作付作業が9月以降に開始されるため予想の域を出ないが、エルニーニョ現象の収束に伴う好天への期待から前年度より大幅に増加し、史上最高を記録すると見込まれている。輸出量についても1億500万トンと、前年度に引き続き史上最高を更新すると見込まれている。

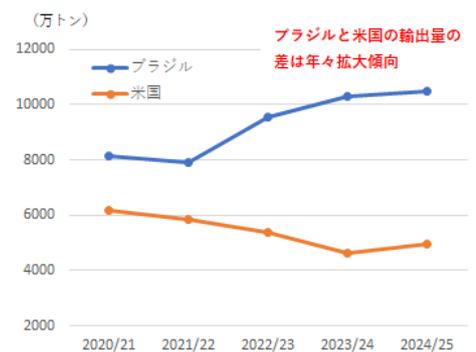
米国及びブラジルの主要輸出先である中国は、世界全体の大豆輸入量の6割を占める世界最大の大豆輸入国である。また、中国は、大豆輸入の9割以上を米国とブラジルから輸入しており、今後も中国市場において、米国とブラジルによる輸出競争が繰り広げられるとみられる。

図6 主要大豆輸出国の生産量推移
(2020/21～2024/25年度)



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

図7 主要大豆輸出国の輸出量推移
(2020/21～2024/25年度)

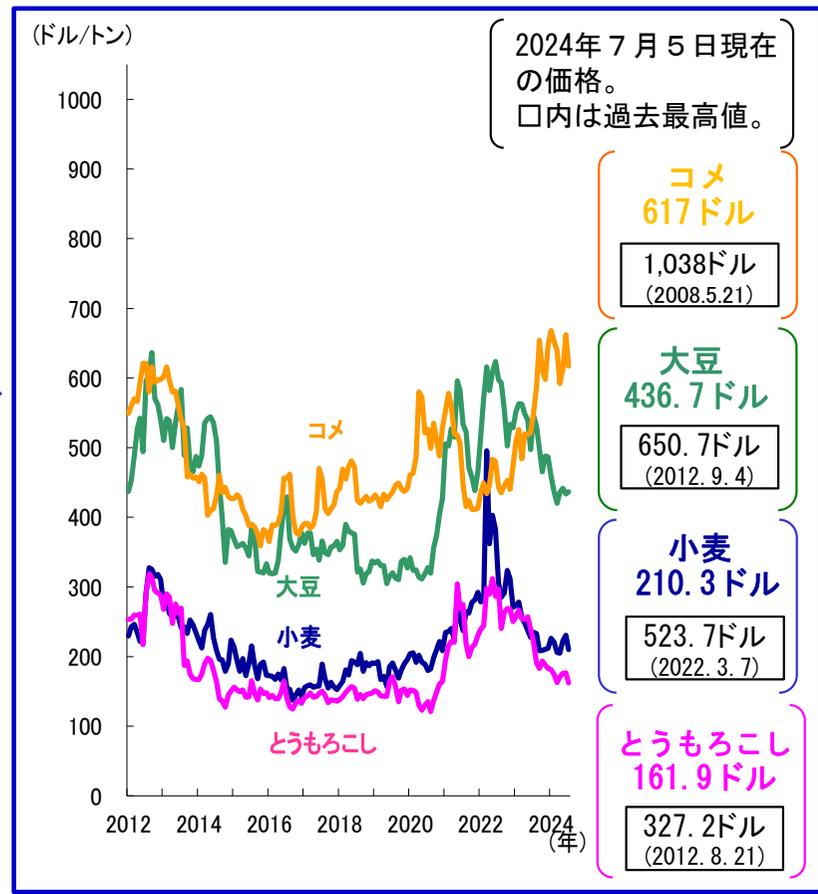
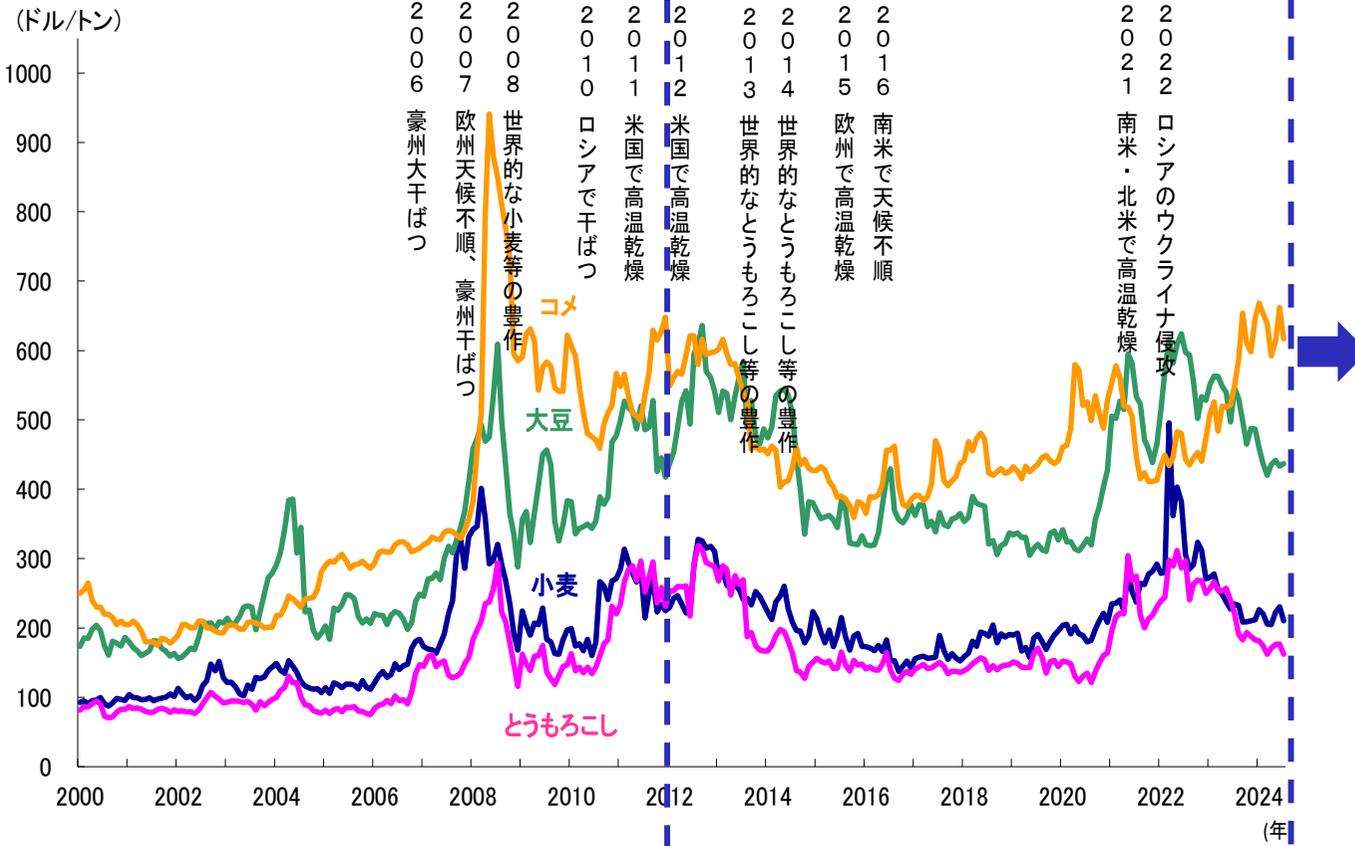


出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省にて作成

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向

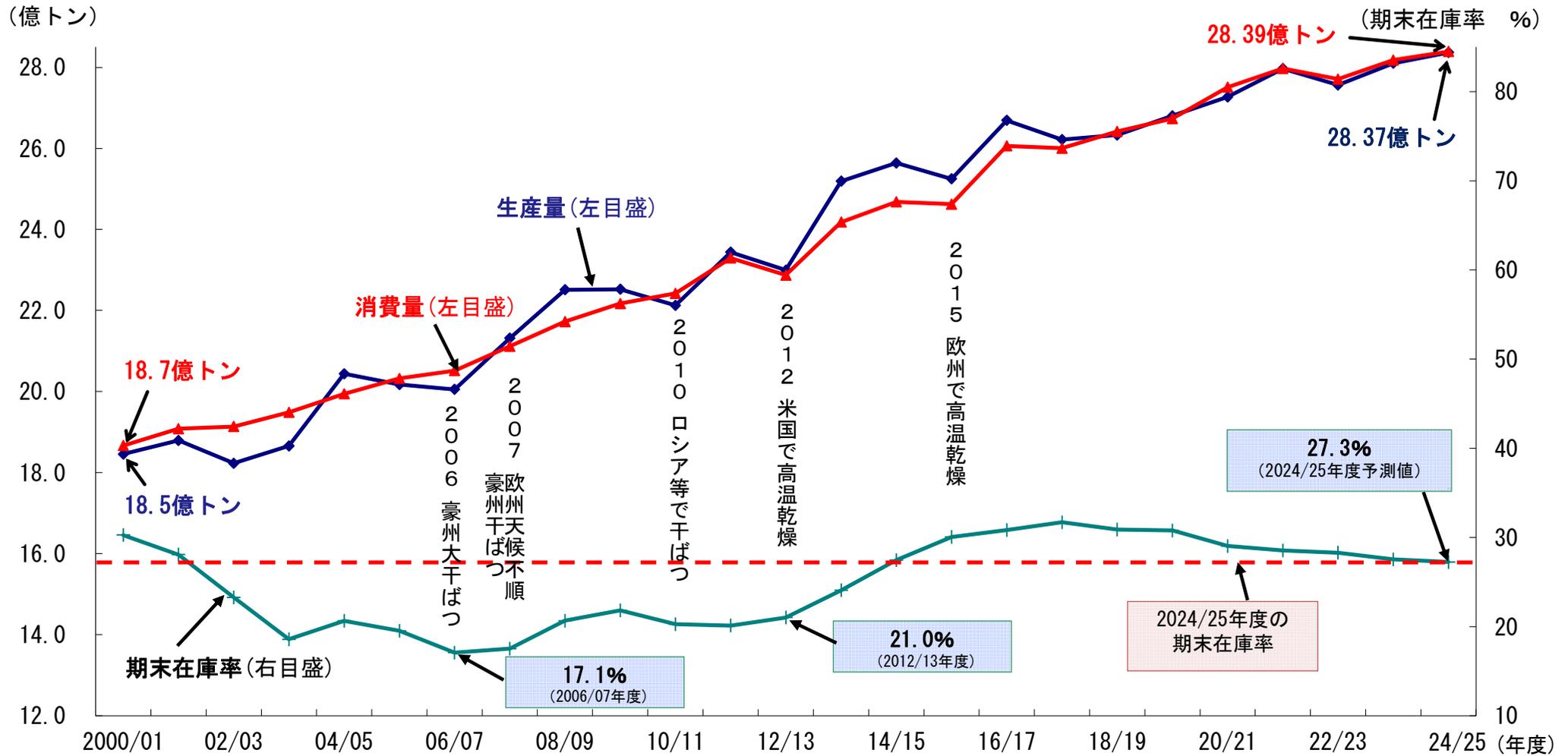


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セトルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
 注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.3%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

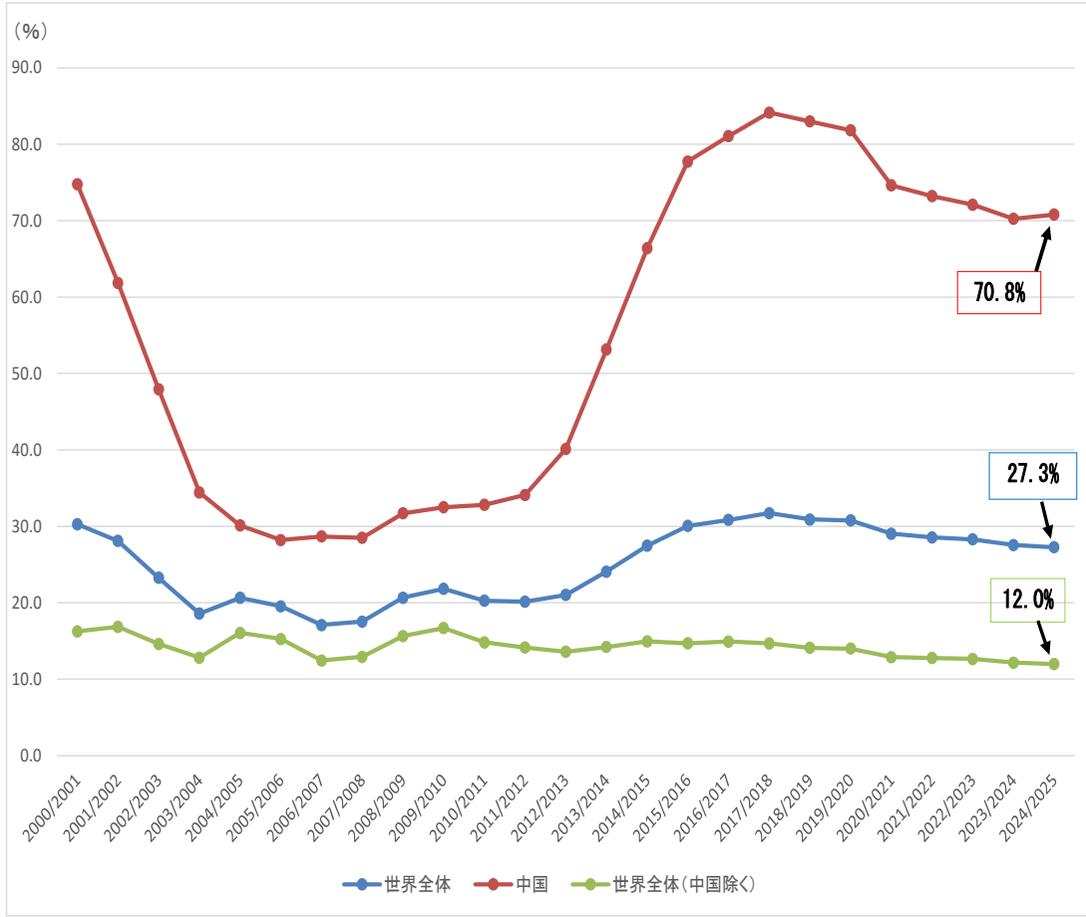


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(July 2024)、「PS&D」

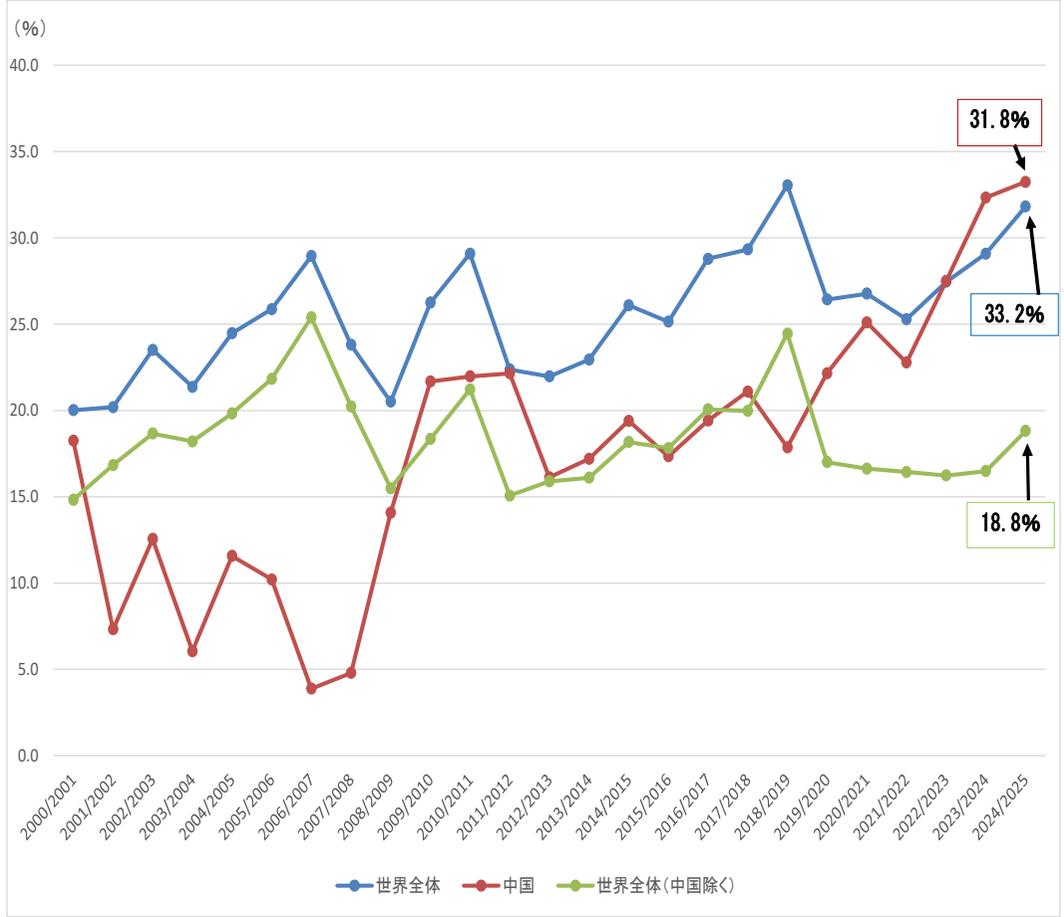
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

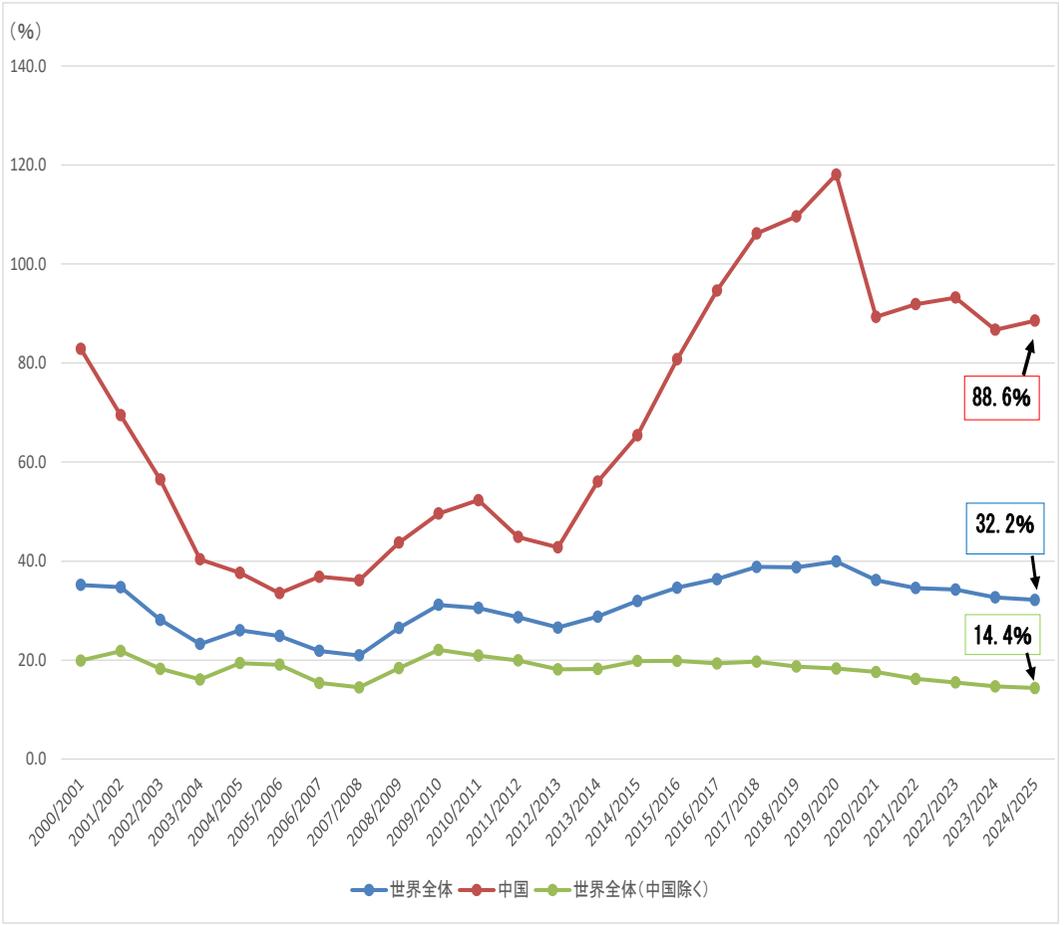
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

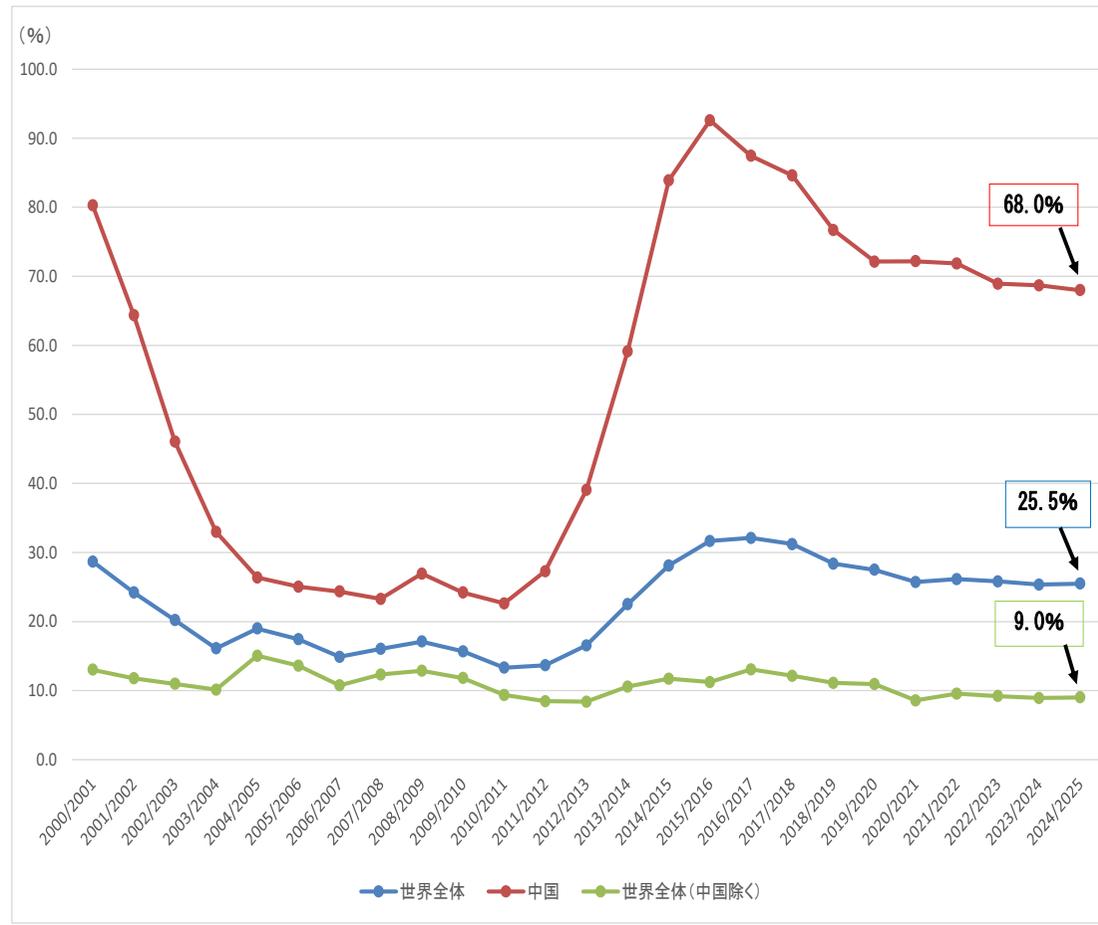
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移

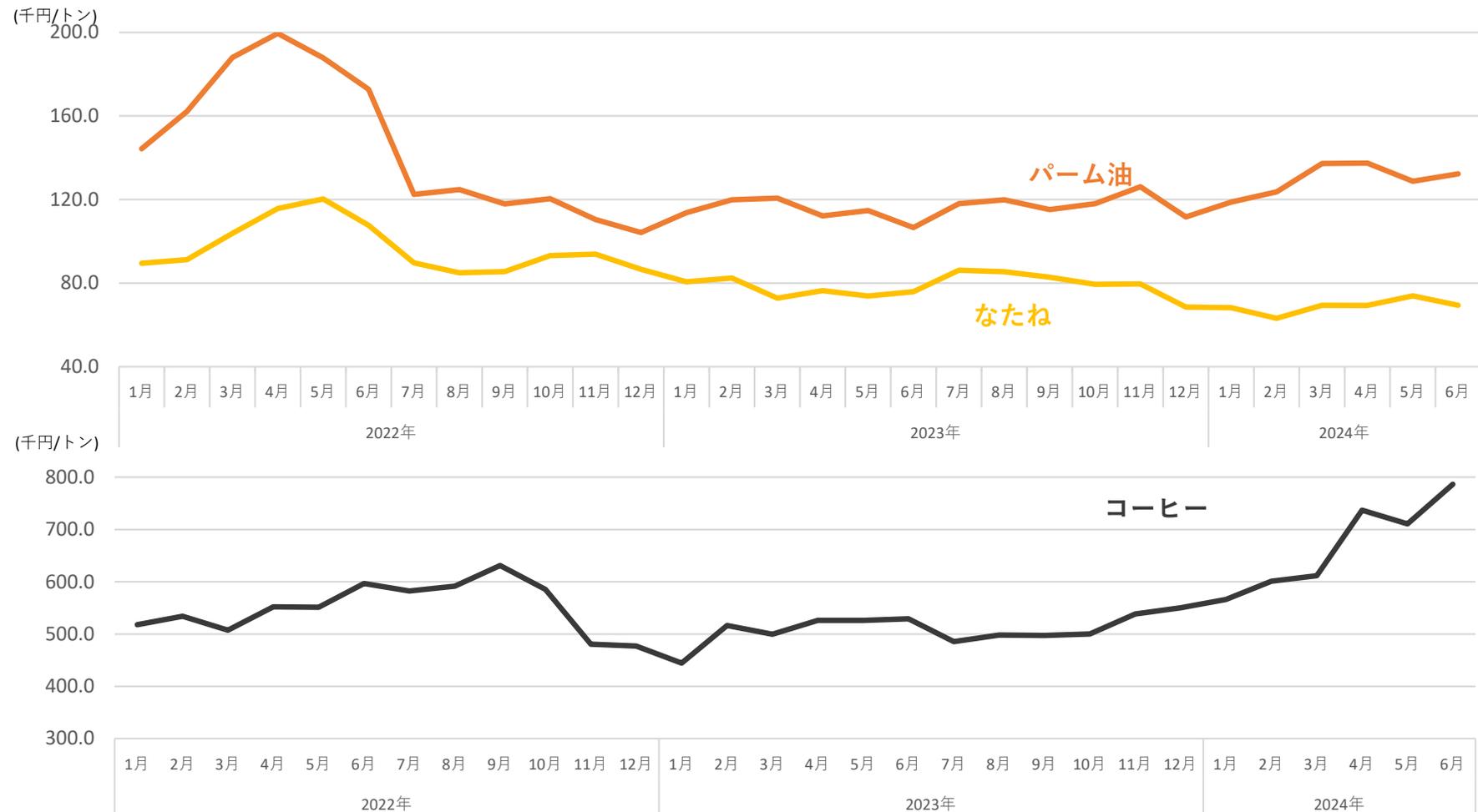


資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2024)

- 注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
- 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100
- 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
- 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、2021年以降、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降は再び市場価格が高騰している。



2024年7月19日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
132.2 千円/トン
199.5 千円/トン (2022.4)

なたね
69.4 千円/トン
120.3 千円/トン (2022.5)

コーヒー
786.3 千円/トン
786.3 千円/トン (2024.6)

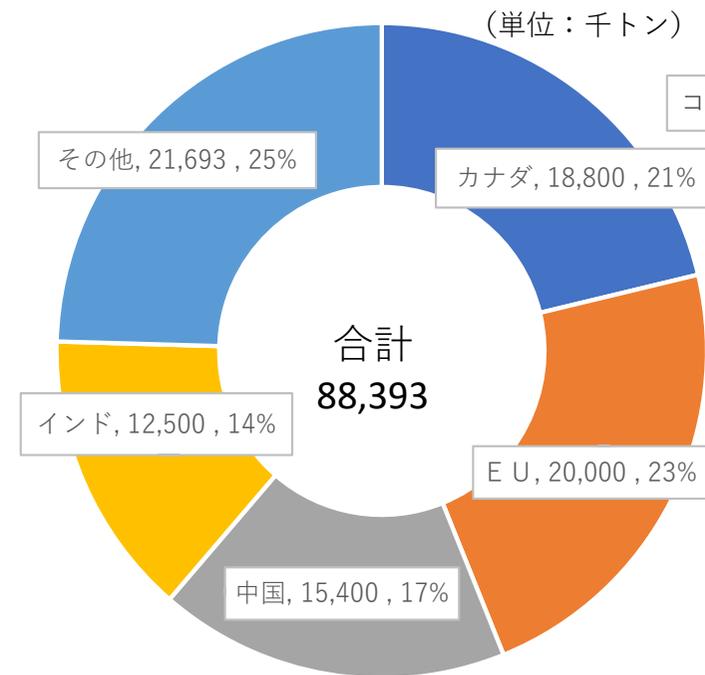
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況

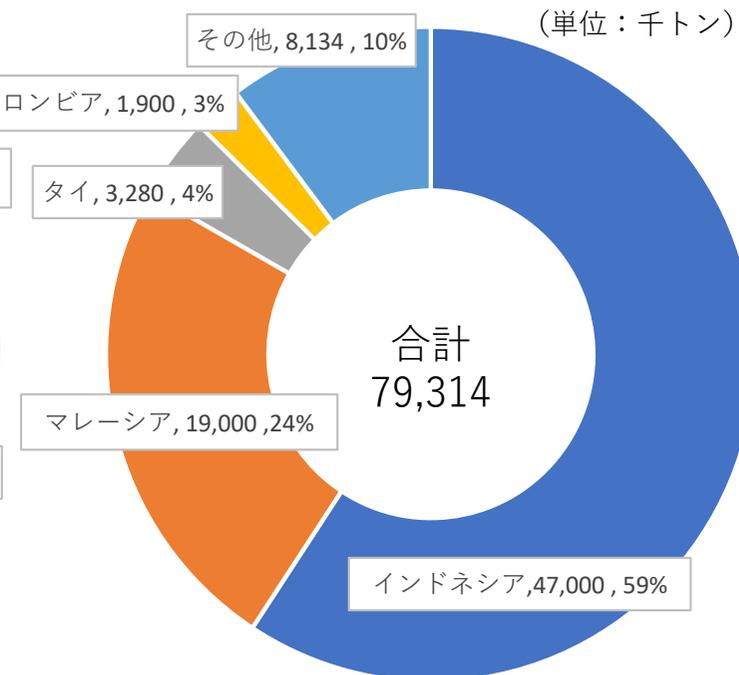
なたね生産量（2023/24）

（単位：千トン）



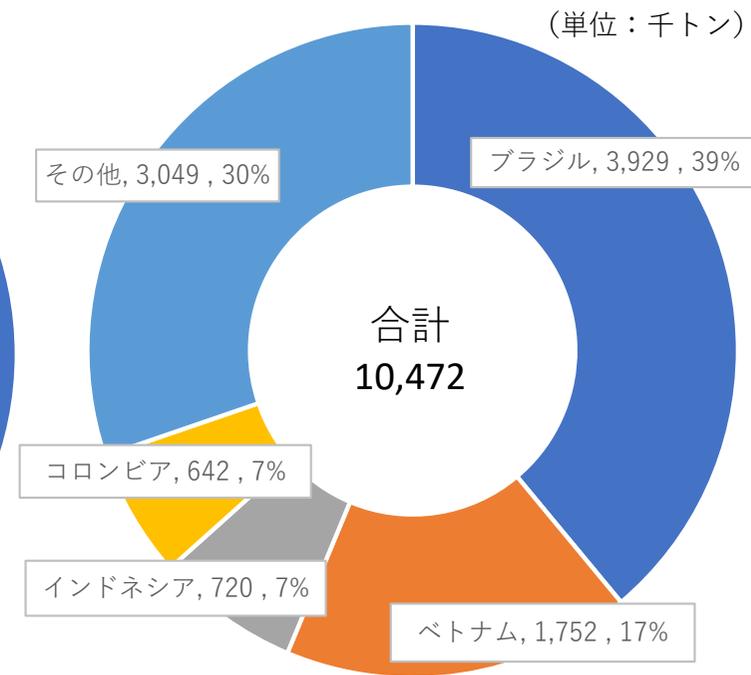
パーム油生産量（2023/24）

（単位：千トン）



コーヒー生産量（2022/23）

（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年6月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年6月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2024年6月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%
オーストラリア	983	48.6%
その他	0	0.0%
合計	2,022	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	574	85.6%
インドネシア	96	14.4%
その他	0	0.1%
合計	671	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	124	35.0%
ベトナム	99	27.9%
コロンビア	34	9.6%
その他	98	27.6%
合計	356	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4 - 4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年												
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
コー ヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3							
前月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6							
前年 同月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6							

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年6月の国内の加工食品の消費者物価指数は113.8～152.3(前年同月比で-8.1%～7.7%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)
(令和6年1月～令和6年6月)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5	R6						上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	118.7	122.1	121.8	122.1	121.9	121.7	122.0	6.1%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	119.7	122.2	125.2	123.9	123.5	124.6	121.4	-2.3%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	114.6	116.9	117.5	117.6	118.0	117.9	117.9	2.4%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	160.2	152.8	151.3	148.3	148.0	147.8	149.0	-8.1%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.1	111.5	112.6	112.9	113.3	113.2	113.8	5.7%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	149.5	153.5	154.2	153.4	153.7	153.4	152.3	-0.4%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	131.1	133.0	132.7	134.5	135.3	130.5	132.6	-1.6%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	108.6	119.0	119.1	118.8	120.2	120.5	120.0	7.7%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	112.6	115.0	115.1	115.3	115.5	115.7	115.9	2.8%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】
食品価格動向調査(農林水産省)
(令和6年1月～令和6年7月)

品目	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5	R6							上昇率 (前年 同月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月		
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	114.5	117.6	117.4	118.6	115.0	117.8	118.9	118.2	-0.6%	1.5%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	117.5	119.8	121.0	121.0	117.3	119.8	114.9	121.0	5.3%	-1.5%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	113.0	114.6	114.6	115.0	118.9	116.7	115.0	115.9	0.8%	1.1%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	159.4	153.3	151.4	150.5	145.1	145.1	144.1	142.9	-0.8%	-10.7%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.9	110.2	110.4	110.2	106.7	108.1	109.2	110.0	0.7%	4.8%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	139.8	144.1	144.4	143.4	140.3	138.6	141.3	140.3	-0.7%	-2.6%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	126.5	125.8	128.8	129.8	123.8	121.3	127.8	129.3	1.2%	-0.8%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	108.0	118.3	118.5	118.5	119.7	119.4	119.7	119.7	0.0%	7.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年8月号（7月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）平均枝肉重量の増加により牛肉生産量はわずかに増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003325.html

（豪州）24年6月の肉牛価格、一部の乾燥気候を背景に下落傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003326.html

（アルゼンチン）24年1～5月の牛肉生産量は前年同期比で減少、一方、輸出量は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003327.html

◆豚肉

（米国）豚肉卸売価格は高値で推移、1～4月の輸出量はかなりの程度増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003328.html

（カナダ）1～4月の豚肉輸出量は中国、米国向けを除き大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003329.html

（EU）豚肉生産量、3カ月ぶりに前年同月を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003330.html

（中国）24年4月末の繁殖雌豚頭数は前年同月比7.0%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003331.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

(EU) 24年6月のバター価格、22年後半以来の1トン当たり6000ユーロ超に

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003333.html

(豪州) 生乳生産量は好調も、生乳需要の低迷を受け次年度乳価は引き下げ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003334.html

(NZ) 生乳生産は回復の兆し、GDT平均取引価格は乳脂肪と乳タンパク質で明暗

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003335.html

※GDT価格…グローバルデイレートレード価格

◆飼料穀物

(世界：トウモロコシ) 生産量、期末在庫は引き続き微減も高水準の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003336.html

(世界：大豆) 主要国での生産増などから、大豆期末在庫は大幅増の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003337.html

(米国) 米国の生産量はやや減少、生産者価格は前年度に続き下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003338.html

(ブラジル) 23/24年度トウモロコシおよび大豆の生産量予測、いずれも前年度を下回る

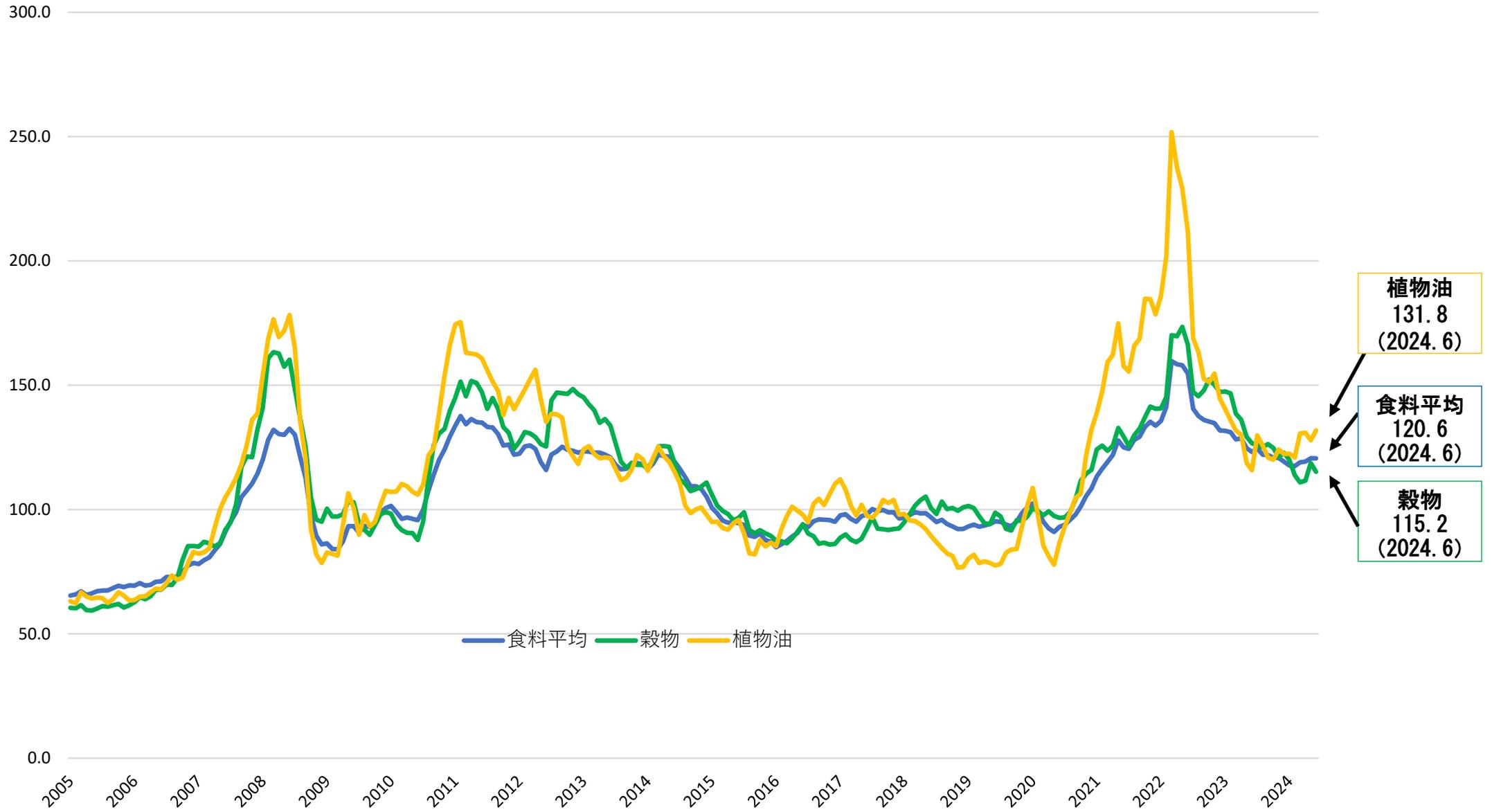
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003339.html

(中国) トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003340.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.6)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

米国太平洋岸北西部（PNW）のビール事情

日本でもそろそろ梅雨が終わり、冷たいビールがおいしい季節になってきたところでしょうか。今回は、米国太平洋岸北西部（パシフィック・ノース・ウェスト、PNW）地域、特に私が住むオレゴン州ポートランドのビール事情についてご紹介します。

まず、穀物関係者しか知らないであろうPNWという表現ですが、大まかに言えば米国ワシントン州、オレゴン州、アイダホ州及びカナダのブリティッシュ・コロンビア州がある太平洋岸の北西部エリアとなります。ちなみに日本向けの米国産小麦は、ほぼ全量がこの地域から輸出されています。

PNWは春から夏の日照時間が長く、また気候も比較的冷涼なことから、ビールの苦みを作るホップの栽培が盛んです（図1）。また、PNWはビール作りに欠かせない原料の大麦（麦芽）の生産地が近いのも重要なポイントです。

そんな背景から、PNWではクラフトビール作りが盛んで、その醸造所や種類もたくさんあります。PNWの中でもオレゴン州はクラフトビールの人気が高く、人口当たりの消費量やクラフトビール醸造所数（ブルワリー）は最も多くなっています（表1）。オレゴンのブルワリーには小規模な経営も多く、それぞれがエッジの効いた（時には効き過ぎた）ビールを製造・提供しているのですが、この背景には、地元企業を大事にする州民気質や、「Keep Portland Weird」（ポートランドよ、変わり者であれ）というスローガンに代表されるリベラルな風土が大きく影響していると思います。このため、日本のクラフトビール事業者からは、「クラフトビールの聖地」とも称されており、クラフトビールの日・オレゴン交流イベント「Fuji to Hood」も隔年で盛大に開催されています。

前置きがすっかり長くなりました。では、当地でどのようなクラフトビールが人気かをご紹介します。クラフトビールにはエール系ビール※が多いですが、その中でも少しアルコール度数が高い「インディアン・ペールエール（IPA）」、さらにホップの苦みやフルーティな香りを効かせた「ウェスト・コーストIPA」、フレッシュホップのミルクィな香りと濁りが特徴の「ヘイジーIPA」などが有名かつ人気です。各ブルワリーでは、6～10種類程度の様々なスタイルのビール（IPA、ピルスナー、スタウトやフルーツ原料系等）を提供していることも多く、注文カウンターでどれを注文していいか困ってしまうこともしばしばあります。私もオーダーで迷った時には、「フライト」と呼ばれる飲み比べセット（写真1）を注文してみることにしています。

※簡単に言えば、クラフトビール屋さん等で提供される、フルーティでホップが効いたビール。大手ビールメーカーのドライ系ピルスナー（辛口、後味すっきり）とは真逆のタイプ。

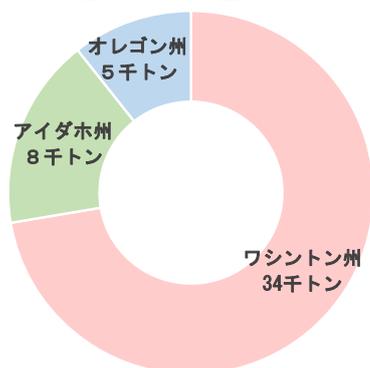
また、ビールのお供のおつまみ類ですが、一般的なトッツ（丸く固めたポテトフライ、写真2）やバーガー、チキンウイングはもちろん、枝豆（エダマミ）やゆず味噌ソース、豆腐サラダ、などの和風なメニューも人気です。この辺が親日的な方が多いオレゴン州あるあるですね。時には学生時代に日本語クラスを取っていた方が、うれしそうに日本語で話しかけてくる場面もあります。

オレゴン州（特にポートランド地域）は、コロナ禍等による中心市街地の空洞化と治安の悪化が懸念され、ホームレス問題が大きな政治課題となっていますが、最近の週末（金曜午後です）の各ブルワリーの盛り上がりを見ると、往事の賑わいを取り戻す日も遠くないなと感じています。

(表1：PNW（米国）におけるクラフトビール事情（2023）)

州名	10万人当たりのブルワリー軒数	年間1人当たりのビール消費量(L)
オレゴン州	9.8	32.2
ワシントン州	7.8	11.4
アイダホ州	6.6	7.9

図1 米国のホップ生産状況（2023）



(写真1) ビール注文に困ったときは? 「フライト」



(写真2) おつまみの代表「トッズ」にもネギが飾られる。



(写真3) 大手スーパーのクラフトビール売場。地ビールを中心に多くの銘柄が並ぶ。

文責：重久直人（在ポートランド領事事務所 領事（経済・広報文化班担当））

【データ・出典】

Brewers Association : <https://www.brewersassociation.org/statistics-and-data/state-craft-beer-stats/>

Oregon Brewers Guild : <https://www.oregongcraftbeer.org/>

USDA National Hop Report : <https://usda.library.cornell.edu/concern/publications/s7526c41m>

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。